オリンピック・パラリンピック教育実践に関しての一考察
― 中学校における取組を通して ―

佐々木　浩

1．はじめに

これまでオリンピックは，アスリートたちの驚異的なパフォーマンスが人々に大きな感動や生きる勇気を与え，世界の人々が一つであることを，スポーツを通して実感できる絶好の機会を提供してきた。そして，多くの人にスポーツを通して若い人たちの人間形成を行うという，オリンピックの持つ教育思想や世界の恒久平和の実現を目指すというオリンピックの理念（オリンピズム）に共感[1)]を与えてきた。また，パラリンピックも 1960 年の第 1 回開催以降オリンピック同様 4 年に一度開催され，障害などに関係のない平等な社会の形成の重要さ[2)]を訴えてきた。そして，競技自体もオリンピック同様，「失ったものを数えるな。残されたものを最大限に生かせ。」というパラリンピックの父，ルードヴィッヒ・グッドマン氏の言葉[3)]を体現したパラアスリートたちの圧倒的なパフォーマンスに我々に大きな感動を与えている。

一方，大会開催に合わせて実施されるオリンピック･パラリンピックに関する教育も，「オリンピック・パラリンピック教育」（以降，「オリパラ教育」という）の名称で，各国で展開されるようになった。この二つのムーブメント[注1)]は，歴史的背景は異なるわけであるが，特に，レガシーが招致計画の立案に際して重視されるようになった近年において，オリンピック教育とパラリンピック教育は，より一体的な形で展開されるようになった[5)]。

我が国においても，スポーツ庁設置の「オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議」が，2016 年 7 月 21 日に「オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて　最終報告」を発表した。その報告では，スポーツの価値をはじめとして，オリパラ教育の意義とその推進体制及び推進のための方策等，スポーツを通じた国際相互理解と世界平和の促進，並びに共生社会の実現・確立に向けて提案している[6)]。また，学校教育では，中央教育審議会「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について（答申）」において，「2020 年に開催される東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催を，スポーツへの関心を高めることはもちろん，多様な国や地域の文化の理解を通じて，多様性の尊重や国際平和に寄与する態度や，多様な人々が共に生きる社会の実現に不可欠な他者への共感や思いやりを

子供たちに培っていくことの契機ともしていかなくてはならない[7)]」と示され，オリパラ教育の充実に向けその意義や必要性を投げかけている。

オリンピック・パラリンピック競技大会は，単なるスポーツイベントではなく，歴史的に見れば，開催国の人々や社会に「オリンピック・パラリンピックレガシー」とされる様々な良い影響をもたらしてきた。それは，競技力の向上や競技施設等の競技大会に直結したレガシーをはじめとして，社会に影響をもたらす有形・無形，計画的・偶発的な幅広いレガシーがある。1964 年の東京大会では，国立競技場や首都高速道路，新幹線等のインフラが整備されるとともに，スポーツ少年団や体育の日といった今日では社会に広く浸透している枠組みが作られた。2020 年東京オリンピック・パラリンピック大会（以降「東京 2020 大会」という）では，世界で初めてパラリンピックをオリンピックと同時に 2 回開催する国として，さらなる発展が国内外から注目されている[8)]。

そこで本研究では，オリパラ教育という無形のレガシーに関しての議論の一助となるために，オリパラ教育の意義と必要性並びに教材的価値について確認するとともに，日本におけるこれまでのオリパラ教育の取り組みと，東京 2020 大会に向けて実施されている東京都のプログラムについて整理する。そして，中学校におけるオリパラ教育（今回は「パラリンピック教育」に焦点を当てる）の実践を通した考察より，今後の日本におけるオリパラ教育について提起することを目的とする。

２．オリパラ教育の意義と必要性，並びにその教材的価値

オリパラ教育では，オリンピアンたちのパフォーマンスを通して，高い目標を目指して努力していくことの尊さ，スポーツを通じての友情や尊敬，また，パラリンピックを通して障害などに関係のない平等な社会を形成していくことの重要さなどを学ぶことができる[9)]。このようにオリンピックやパラリンピックの理念について学ぶとともに，これらのことを教育的な営みの中に落とし込んでいくこと[10)]がオリパラ教育の中核となる。

2-1．オリンピック・パラリンピックの価値とオリパラ教育の意義と必要性

国際オリンピック委員会（IOC）は，学校教育の中で・スポーツの価値やオリンピックの価値について教えるプログラムの普及を目指している[注2)]。一方，国際パラリンピック委員会（IPC）もパラリンピックの価値を 4 つ提示している[注3)]。

オリンピック・パラリンピックの価値を学ぶことは，今後健康長寿社会，思いやりや正義感に富んだ社会，平和と友好に満ちたグローバルな共生社会等の構築が求められて

いる中で，スポーツの価値や効果の再認識を通じて自己や社会の在り方を向上させることにより，国際的な視野をもって世界の平和に向けて活躍できる人材を育成し，求められる社会の将来像を実現する[12]ために有効であると考えられる。

そもそも，スポーツは，からだを動かすという人間の本源的な欲求に応えるとともに精神的な充足感や楽しさ・喜びをもたらし，人々が生涯にわたり心身共に健康で文化的な生活を営む基盤となるものである。スポーツは，その喜びを通して，人々を勇気づけ，お互いを結びつけることにより，希望を生み出し，社会を変革する契機となり，多様性，寛容，公正さの尊重を促す可能性をもつ。また，スポーツを通じて，人は，自身の限界に挑戦し，これを克服し，新たな機能や学びを獲得することが可能となる。さらに，スポーツは，世界共通の人類の文化であり，国際相互理解と世界平和を促進するものである。このように，スポーツには，自己実現・変革を促す力があるとともに，社会や世界を変える大きな力があるのである[13]。したがって，スポーツを通じたオリパラ教育の実践による自己実現や自己意識のさらなる向上，また，社会の課題に対して他者と協働しつつ主体的に対応していく力の育成，さらには，共生社会に向けての多様性の尊重，フェアプレイの精神やボランティア精神に代表される公平・公正及び公徳心の育成は，これからの変化の激しい時代を生き抜いていく小中高校生にとってはとても重要であると考えられる。

オリンピック・パラリンピックは，スポーツの文化的・教育的機能を通じ，子ども達に「人生で大切なことは何か」「そのために必要な行動はどのようなものか」を考える機会を提供してくれる[14]。

2-2. オリパラ教育の教材的価値

オリパラ教育は大別して，①「オリンピック・パラリンピックそのものについての学び」と，②「オリンピック・パラリンピックを通じた学び」から構成される。実際には①と②は相互に関連し，双方を往還しながら学習が展開されるであろう。子供たちに身に付けさせたい内容としては，オリンピック・パラリンピックそのものに関する知識から，「歴史」「スポーツ種目」「用具･器具の開発」「ボランティア精神」「おもてなしの心」等，その価値から「努力」「精神」「態度」等を学ぶことができる。また，各種競技や選手からは，「スポーツマンシップ」「挑戦」「ルール遵守」「フェアプレイの精神」「自己実現」「健康増進」「他者の尊重」等を学ぶことができよう。さらに，世界平和の構築や次世代の若者の育成から，「国際平和」「人権」「共生社会」「自然環境」等学ぶことができる。一方，忘れてはならないものとして，オリンピック・パラリンピックが抱えてい

る負の部分の問題がある。オリパラ教育は，理想やポジティブな面だけではなく，光と影の両面に配慮したバランスある批判力を子供たちに身に付けさせることもできるのである[15]。それは例えば，勝利至上主義における「ドーピング問題」をはじめとして，「スポーツ賭博」や「過度な商業主義」，そのほか「国籍問題」やボイコットにまで発展する「政治的・経済的問題」等国際的な課題にまで及ぶ。

このように，オリパラ教育は単にスポーツを学ぶだけでなく，人としての生き方をはじめとして，政治や経済，環境など様々な課題を含んだ社会の縮図[16]を学ぶことができ，学習教材としては計り知れない魅力的な価値を有しているといえる。

3．オリパラ教育の具体的な取り組み

3-1．これまでのオリパラ教育の取り組み

日本は，1964年の東京大会を機に世界で最も早くオリンピック教育を組織的に展開したという経緯がある。それは，パラリンピックの視点は入ってはいなかったが，小学校から中学校，高等学校において各教科や特別活動などを通して，オリンピックの理念や歴史，異文化を理解していく態度の重要性，さらにはフェアプレイやマナー教育も行われた[17]。当時の取り組みに関しては，2016年にスポーツ庁より出されたオリパラ教育の推進に向けての最終報告に，「1964年当時の全国におけるオリンピック教育について[18]」として参考資料が添付されており，当時のオリンピック教育の様子を垣間見ることができる。そこには，文部省（当時）がオリンピックの基礎知識やオリンピック精神を普及させるために「オリンピック読本」を作成したと記述されている。そして，この読本が東京都をはじめとして，各地方自治体が独自の読本を作成する上での参考資料となったという。実際，京都市においては，オリンピック読本を作成し，オリンピックを開催することで増加するであろう外国人観光客を迎えるにあたり，必要な心構えと京都市民憲章を合わせて紹介している。当時の教育としては，外国人観光客にマイナスイメージを与えないために，日本国民全体の課題とされていた公衆道徳の底上げを図った取り組みにその特色を読み取ることができる。

3-2．東京都における現在の取り組み

東京2020大会の開催都市である東京都は，他の自治体の先導的な立場に立ちオリパラ教育を実施している。2015年12月には，「東京のオリンピック・パラリンピック教育を考える有識者会議」が最終提言を発表した[注4]。

その最終提言を受けて，東京都教育委員会は2016年1月に「東京都オリンピック・パラリンピック教育」実施方針を打ち出した。東京都は，東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会を，子供たちの人生にとってまたとない重要な機会と捉え，国際社会に貢献し，東京，そして日本の更なる発展の担い手となる人材を育成していくとともに，東京2020大会の経験を通じ，その後の人生の糧となるような掛け替えのないレガシーを子供たち一人一人の心と体に残していくことをねらい，オリパラ教育を2016年度から都内全ての小学校，中学校，義務教育学校，中等教育学校，高等学校及び特別支援学校を対象に実施している[20]。

東京都の取り組みの具体的な枠組みは「4×4の取組」と言われ，「オリンピック・パラリンピックの精神」と，オリンピックムーブメントの3つの柱「スポーツ」，「文化」，「環境」を合わせた4つのテーマと，それに関わる「学ぶ（知る）」「観る」「する（体験・交流）」「支える」の4つのアクションを組み合わせている[21]（図1）。そして，この「4×4の取組」を多彩に展開することで，子供たちに以下の5つの資質を重点的に育成することをねらいとしている[注5]。

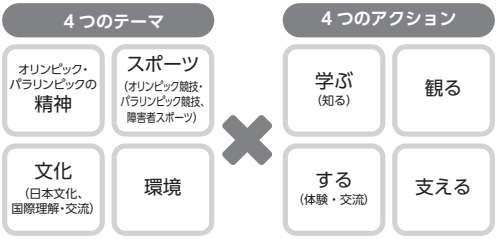


図1 「4×4の取組」の展開イメージ（東京都教育委員会）

さらに，東京都教育委員会は2016年7月に「オリンピック・パラリンピック教育実践事例集」[注6]を発刊し，オリパラ教育の育成すべき人間像を目指して，各学校における「4×4の取組」がより創意工夫を凝らした多彩な展開になるよう支援している。このような東京都教育委員会の取組により，各学校では，体育科をはじめとした各教科における学習指導はもちろんのこと，総合的な学習の時間，特別活動といった時間の中で，アスリートや外国人との交流，大会参加国の産業や文化などの学習，礼儀作法やマナー・エチケットなどの授業を展開している。また，国際理解教育や我が国の伝統文化教育，さらには，環境教育とも関連しており，多様な実践が展開されている[23]。

4．本研究における授業実践記録

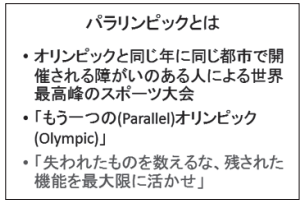
本研究では上記内容を踏まえ，中学生を対象にオリパラ教育の中でも特にパラリンピックに焦点をあて実践する。

4-1．対象と期間

S区立S中学校2年生（在籍数：男子106名，女子80名，合計186名）を対象として，2017年9月29日に総合的な学習の時間の1単位時間として実施した。授業者は筆者である。

4-2. 教材の内容

本研究の授業実践では，国際パラリンピック委員会（IPC）公認教材である日本版「I'mPOSSIBLE（アイムポッシブル）」[注7)] を，中学校２年生対象用に多少手を加え活用した。元教材の「I' mPOSSIBLE（アイムポッシブル）」は，パラリンピックの競技の特徴や歴史を学ぶ座学と，実際にパラリンピックスポーツ（ゴールボールとシッティングバレー）を体験する実技から構成されている（4 単位時間扱い）。本研究では，1 単位時間（50 分）で 2 年生全員（186 名）の一斉学習という設定であったため，座学の 1 単位時間を選択し，中学生の実態に合うよう修正し実施した（図 2）。

1. 授業名　オリンピック・パラリンピックを学ぶ２　パラリンピックってなんだろう？			
2. 目標 ・パラリンピックの特徴や発展について学び，あきらめないことの大切さや，限界に挑戦することの尊さ，工夫すればできないことなんてないという気持ちを醸成する。 ・パラリンピックへの興味関心を深め，東京大会に向けて高揚感を引き出し，応援に行きたい！パラリンピックについてもっと学びたい！自分も関わりたい！という気持ちになる。 ・パラリンピック大会の究極の目的である，共生社会の構築，すなわち「誰もが受け入れられる社会を作るにはどうすればいいか，何ができるのか」についても考えるきっかけとなる。			
3. 指導上の留意点・工夫 ・パラリンピックについてあまり知らないことを前提の展開である。 ・教師の一方的な説明にならないように，児童の気づきを大切にし，より興味を持てるような展開（クイズや映像の使用）に留意する。 ・創意工夫したり諦めない気持ちにさせたりすることは，パラリンピアンに限ったことでなく，自分たちも同じと気づかせたい。			
4. 展開			
	学習活動・内容	指導上の留意点	資料
導入12分 導入12分	1. パラリンピックについて知っていることを聞く。 2. リオパラリンピックの映像を見る。 	・４×４の取組についても触れる。 ・パラリンピックについて学ぶ意欲を持たせる。 ・映像から「楽しそう」「おもしろそう」「すごい！」などの感想や「何だろう？」という疑問を引き出すようにする。 ・障害に関するネガティブなコメント（「足がなくてかわいそう」「手がなくて怖い」など）はできるだけ回避し，そういうコメントが出てきた場合は，映像や写真などから，とても速い，力強いなど，選手の素晴らしいところに着目するように促す。 ⇒選手の表情を見てみよう。悲しそうかな？楽しそうかな？ ⇒泳ぎの速さはどうだった？	・リオパラリンピック大会ダイジェスト映像 
展開33分	3. パラリンピック大会の意義やどのように発展してきたかを理解する。 ・パラリンピッククイズを行う。 	・クイズから興味を持たせ，理解させる。 	

・パラリンピックの歴史について学ぶ。

パラリンピックの歴史

- ストーク・マンデビル大会
- パラリンピックの元

1948年イギリスのストーク・マンデビル病院でルードウィッヒ・グットマン医師が開催した

パラリンピックの歴史

- 第二次世界大戦中、戦争で負傷した兵士たちの治療とリハビリのために設置された脊髄損傷科がパラリンピック誕生の舞台となる。
- 「車いすよりスポーツを」

パラリンピックの歴史

- 1988年ソウル大会より正式名称を「パラリンピック」とする。
- 2012年ロンドン大会から「オリンピック・パラリンピック」と併記するようになった。
- もはやリハビリのための大会ではない。

・パラリンピッククイズを行う。

パラリンピッククイズ

○第4問
パラリンピックへの日本の参加はいつから？
①1960年第1回ローマ大会
②1964年第2回東京大会
③1988年第9回ソウル大会

パラリンピッククイズ

○第5問
リオ大会に参加した国と地域はいくつ？

① 81
② 124
③ 159

パラリンピッククイズ

○第6問
ロンドン大会に参加した人数は？

① 1，273人
② 2，273人
③ 4，273人

パラリンピックの進化

どこが？

1960年ローマ大会

2012年ロンドン大会

パラリンピックの進化

どこが？

1958年ストーク・マンデビル大会

2016年リオ大会

パラリンピックの進化

○「人間の限界に挑戦すること」を目指して、特別に開発された用具を使う競技もある。
○スポーツとして、より安全により公平に競技できるように、用具が進化したり、ルールが改正されたりしている。

4. パラリンピックから学ぶ。
・パラアスリートから自分の生き方について考える。
・映像を見る。

パラリンピックから学ぶ

- 持っている力をフルに生かしている。
- 年齢も幅がある。残った機能も違う。
- 新たな希望を与えてくれる。
- 自分もやればできる。あきらめてはいけない.

・自分たちもやればできるという気持ちにさせる。
・希望や生きる勇気を感じ取らせる。
・自分の現状を見つめさせる。

パラリンピックから学ぶ

- それぞれの選手が新たな可能性を見せてくれる。
- 失ったものを数えるな、残された機能を最大限に活かせ！（強化する⇒可能性が広がる）
- 本当のアスリートたち。

・パラリンピアンの真剣な練習映像

パラリンピックから学ぶ

「失ったものを数えるな。残されたものを最大限に生かせ！」

まとめ5分

5. 学習を振り返る。
・映像を見る。
・学習カードを記入する。

東京大会

- 2020年 東京大会
- もっとパラリンピックについて学んでいこう！
- 2020年8月25日（火）～9月6日（日）
- 競技数：22競技 527種目
- 参加予定：164の国と地域・4,200選手（ロンドン大会の例）
- パラリンピックを応援しよう

・パラリンピックをもっと調べたい，パラリンピックに関わりたいという高揚感を引き出す。
・障がい者の日常の姿から，今後の自分たちの生き方のヒントが得られるよう助言する。
・芦田愛菜さんの座右の銘
「努力は必ず報われる。
報われない努力は，まだ努力とは言えない。」

・イギリスのテレビ局 channel 4 作成の映像
「We're The Superhumans」

最後に

- パラリンピックのプロモーション映像
- イギリスのテレビ局「Channel 4」が作成
- 「We're The Superhumans」
- "Yes, I Can. Yes, I Can. Yes, I Can"
- 「誰にだって、できないことなんて何もない」

図２　学習指導案（I'mPOSSIBLE 参考：授業で使用したプレゼン資料の一部を含む）

4-3. 授業の実際

○ 2 つのねらい，①「パラリンピックを学ぶ」，②「パラリンピックから学ぶ」

本実践は，①「パラリンピックを学ぶ」の観点から，パラリンピックへの興味関心を深め，東京 2020 大会に向けて高揚感を引き出し，「応援に行きたい！」，「パラリンピックについてもっと学びたい！」，「自分も関わりたい！」という気持ちになることを一つ目のねらいとする。また，二つ目として，パラリンピックの特徴や発展について学び，パラアスリートのパフォーマンスから，「あきらめないことの大切さ」，「限界に挑戦することの尊さ」，「工夫すればできないことなんてないということの気持ち」を今の自分と向き合うことにより醸成することを②「パラリンピックから学ぶ」として，もう一つのねらいとしている。

実践の「導入」では，リオデジャネイロパラリンピックのダイジェスト映像を視聴し，パラアスリートたちの驚異的なパフォーマンスを再確認することにより授業をスタートさせる。中学 2 年生の生徒たちは，パラリンピックに関しての予備知識がさほどなく映像視聴からの導入は，多くの子供たちにインパクトを与え，本授業のねらいへ導くのに効果的であると考えられる。

授業の「展開」では，最初にパラリンピック大会の意義や歴史について，三択クイズを導入しながら学習する。その際，治療とリハビリのために導入されたスポーツがきっかけであること，スポーツが身体機能の回復だけでなく，精神面の効果もあることから発展していき，もはやリハビリのための大会ではないことを押さえる。後半部分では，パラリンピックの進化について，用具の進化やルールの改正について同じく三択クイズを導入しながら学習する。その際，オリンピック大会と同じようにパラリンピアンも人間の限界に挑戦していることを押さえ，一つ目のねらい①「パラリンピックを学ぶ」に迫る。

そして，「展開」の最後では，二つ目のねらいである「あきらめないことの大切さ」，「限界に挑戦することの尊さ」，「工夫すればできないことなんてないということの気持ち」の醸成のために，自分の今の生活を振り替えさせながら子供たちに考えさせる。その際，パラリンピアンたちの真剣な練習風景の映像を視聴させ，「失ったものを数えるな。残されたものを最大限に生かせ！」といったパラリンピックの父といわれるルードヴィッヒ・グットマン医師の言葉をキーワードとして生徒たちの心に問いかける。

授業の「まとめ」の段階では，イギリスのテレビ局 channel 4 が作成したパラリンピックのプロモーション映像「We're The Superhumans」を視聴し授業を終える。この映像は，

「Yes, I can」「誰にだってできないことは何もない」という思いを強く持たせてくれる効果があると考えられる。

4-4. 学習振り返りカードの結果と考察（14 名抽出）

授業の「まとめ」として，学習カードを用いて本授業の振り返りを行った。設問は，①「今回の授業で分かったこと，学んだことは」，②「授業全体の感想」の 2 点で，自由記述（複数記述可）で回答する。表 1 に抽出生徒 14 名の設問①の回答内容を「パラリンピックを学ぶ」と「パラリンピックから学ぶ」に質的に分類し整理した。表 2 には，同じ抽出生徒 14 名の設問②の回答を整理した。

表 1 から，生徒たちは，ねらい①「パラリンピックを学ぶ」と，ねらい②「パラリンピックから学ぶ」の両方のねらいをおおむね達成していることが推察できる。特に，ねらい①では，回答「3，4，10」の生徒は，今まで自分で漠然と描いていたパラリンピックに対する思いが，この学びを通して新たな価値観として創造されたことが推察される。

ねらい②では，「13，15，20」の回答のようにあきらめないことの大切さを学び取った生徒，「14」の回答のように自分の生き方の参考にするきっかけを学んだ生徒がいたことが分かる。また，回答「16，17，19，21」からは，障害のあるなしを区別しない考え，もっと言えば「心のバリアフリー」への発展が期待できる学びを習得できた生徒がいたことが分かる。さらに「18」の回答からは，共生社会の構築へ関心を寄せていた生徒もいたことが分かる。

表 2 の授業全体からの感想では，「1，6，7，8，10，11，15，18，21，22」の回答のように，「すごい」と多くの生徒がパラリンピックやパラリンピアンに対して感動を覚えたり，自分も頑張ろうという思いを抱いたりしたことが分かる。また，「2，5，13，16，17，19」の回答のようにパラリンピックに関心を抱いた生徒も多くいたことが分かる。さらに，「4，12，14」の回答のように，自分も役に立ちたい，ボランティアをしたいという思いを抱いた生徒もいることが分かる。そして，「3，9」の回答のように共生社会の構築に関心を寄せる感想も見ることができた。

表 1　授業の振り返りカード設問①の結果

1．今回の授業で分かったこと，学んだことは	
○パラリンピックを学ぶ	○パラリンピックから学ぶ
1. 障害も様々な種類があるので，選手それぞれの競技しやすいスタイルがることが分かった。 2. パラリンピックの起源が，病院のリハビリだったことを初めて知った。 3. 自分の中で勝手に，オリパラではオリンピックがメインだと思っていたけど全く違いました。	12. 失ったものを悲しむのではなく，残されたものを最大限使うこと。 13. 努力が実るまで努力し続けること。 14. 自由に使える体の部位が少なくなってしまったとしても，残っている機能を最大限に使って戦っていくパラリンピックの選手たちの姿を見習おうと思った。

4. パラリンピックもオリンピックと同じようにすごい戦いをして，たくさんの人たちが関わっているんだと思い，パラリンピックに対しての考えが変わりました。 5. パラリンピックの旗のことや目的のこと。 6. パラリンピックの選手の凄さや車椅子などの器具のこと。 7. 最近の技術のおかげで，障がい者の人たちが安心してスポーツに参加できるようになってきたこと。 8. 障がい者の参加人数が伸びていること。 9. パラリンピックの人たちが，障害をもって大変なのに頑張って練習していることを学んだ。 10. パラリンピックが思っていたイメージと違っていた。観てみたい。 11. 今では障がい者，健常者関係なくスポーツをすることができ，パラリンピックにいろいろな国が関わっていることが分かりました。	15. 障害などは関係なく，人それぞれみんな頑張れば何でもできるということ。 16. 障害があろうがなかろうか，そのことで何もできなくなるわけではないこと。 17. 体に障害を抱えていても，それを自分の個性とし，自分にできることを精いっぱい楽しんでやっているのだとわかりました。 18. 何か障害を持っている人でも，すごく一生懸命に頑張っていてすごいと思い，公平な社会にしていくことを目指していくことが大切だと授業を学び分かりました。 19. 障害があっても，できないことはないということが分かり，障害はハンデとは考えず，今あるものが自分の全てで，それを出し切ることで健常者とは変わらずとてもすごいことができるということが分かりました。 20. パラリンピックもオリンピックと同じで，選手たちが一生懸命練習しているのを見て，あきらめてはいけないことを学んだ。 21. 障害のある人でも普通の選手のようにとても素晴らしい姿でスポーツを頑張っていて，その努力はものすごいものだったと思うし，自分に残された可能性をとても大切にしているんだなと思いました。

表２　授業の振り返りカード設問②の結果

2. 授業全体の感想
1. 体が不自由であっても，健常者と同じようにパラリンピックという大きな大会に出て，自分のベストを出そうとしていてすごいなと思います。 2. オリンピックとパラリンピックでは，オリンピックにばかり目が行ってしまうことが多いので，パラリンピックも見てみようと思いました。 3. スポーツをしたい障害のある人がもっと気軽にスポーツができるようになるとよいと思います。 4. 選手が本気でプレイができるように私たちが支えていきたいと思った。 5. 確かにオリンピックとパラリンピックは違うけど，選手の努力は同じだし，頑張ることが大切なのだとわかり，2020 年の東京オリンピック・パラリンピックが楽しみになりました。 6. 満足のいく体ではなくても，こんなに頑張っている人たちがいるんだと思いました。 7.「手がなくても足がある。足がなくても手がある。」辛いことがたくさんあるのに，希望を持って強く立ち向かっていく人たちがすごいなと思いました。 8. 恵まれた体に生まれ育った自分だからこそ，からだの不自由な人たちのために何かできることはないかと考えました。とても感動しました。 9.「障がい者」だからという言い方や，手助けをする時の声のかけ方など気を付けなければならないことがたくさんあるんだと思った。 10. 体の不自由な人でも精一杯頑張っているのだと知り，健常者の私にももっと頑張れることがあるのだろうと思いました。 11. 障害を持っている方も，スポーツを一生懸命工夫していてかっこよかったです。私も，「努力は必ず報われる。報われない努力はまだ努力といえない」という座右の銘を知っているのですが，スポーツに限らず何事も努力をすればできるようになるんだなと改めて思いました。 12. 将来その人のためになれるように頑張りたいです。来年もやってほしいと思いました。 13. 東京オリンピック・パラリンピックを見に行こうと思った。 14. 勉強を頑張ってボランティアをしたいと思う。 15. 障害があっても，ハンデとは考えないということがとてもすごいと思いました。 16. 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックは両方見ようと思いました。 17. 競技がたくさんあって面白そうだと思いました。 18. 今の自分についても考えられて，私も頑張らなきゃなと思いました。 19. 普段あまり耳にしないので，今日よく話を聞けて良かったです。 20. わかりやすかった。 21.「できないことはない」と動画を見ていて言われた気持ちになった。あきらめないで頑張っていこうと思った。 22.「失ったものを数えるな。残されたものを最大限に生かせ」という言葉が心に残った。これは自分たちにも言えることだと思う。

4-5. 授業実施１か月後のアンケート結果と考察

本授業「オリンピック・パラリンピックを学ぶ2」の実践が，授業を終えた後も生徒たちの心にどの位残っているか，単発的なイベントのような授業で終わっていないかを確認するために，2017年9月29日の授業実施日から1か月以上たった同年11月10日に，授業対象となった2年生生徒に本授業に対するアンケートを行った(表3)(図3)(図4)(図5)(表4)。

表３　授業実施１か月後のアンケート項目

オリンピック・パラリンピック学ぶ２の授業についてアンケート　２年（男　・　女）	
1. 9/29の授業はわかりやすかったですか	（はい・どちらでもない・いいえ）
2. 9/29の授業はためになりましたか	（はい・どちらでもない・いいえ）
3. 自分の生き方について参考になりましたか	（はい・どちらでもない・いいえ）
4. パラリンピックをテレビで見てみたいですか	（はい・どちらでもない・いいえ）
5. パラリンピックを競技場で観戦してみたいですか	（はい・どちらでもない・いいえ）
6. パラリンピックでボランティアをしてみたいですか	（はい・どちらでもない・いいえ）
7. パラリンピックをもっと知りたくなりましたか	（はい・どちらでもない・いいえ）
8. パラリンピックに関係してもっと知りたいことがあれば記述してください	

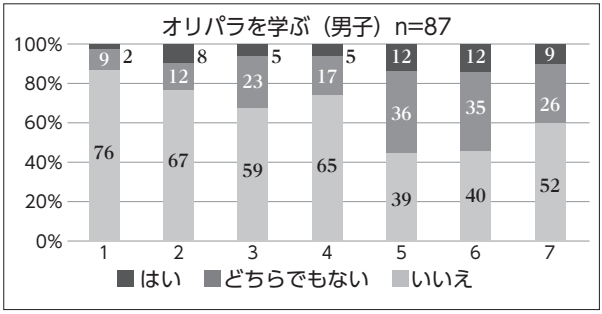


図３　授業実施１か月後のアンケート結果（男子）

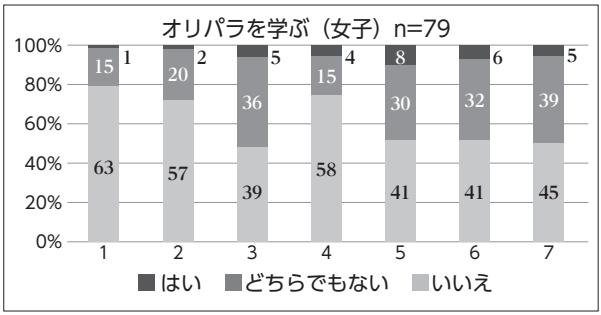


図４　授業実施１か月後のアンケート結果（女子）

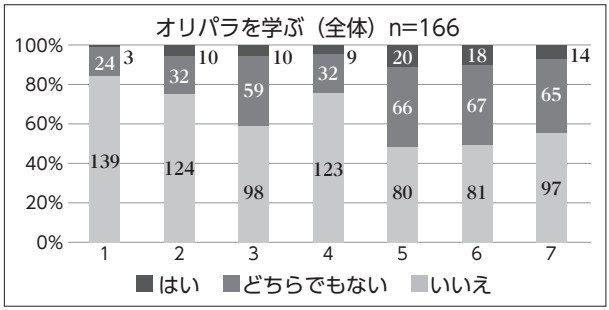


図５　授業実施１か月後のアンケート結果（全体）

表４　設問 8. パラリンピックに関係してもっと知りたいことの記述結果

設問 8. パラリンピックでもっと知りたいこと		男	女	合計	
パラリンピック競技について	どんな競技があるか（競技人口も含む）	5	7	12	30
	もっと競技を見たい，知りたい	2	3	5	
	競技を体験したい	1	1	2	
	競技のルール（クラス分けも含む）	5	3	8	
	競技の生まれ方や歴史	2	1	3	
パラリンピアンについて	パラリンピアンの紹介	2	1	3	11
	パラリンピアンの練習	1	0	1	
	パラリンピアンの気持ち	1	3	4	
	パラリンピアンの日常	1	2	3	
その他	義足・義手・車いす等器具について	4	5	9	12
	ボランティアのやり方	1	2	3	

授業１か月後のアンケート結果によると，設問１「わかりやすかったか」，設問２「ためになったか」に対して，男女とも 80％前後の生徒が「はい」と答え，本授業の実践が１か月後の生徒の心に好印象として残っていることを推察することができる（図 1，2)。また, 設問 4「テレビで見たいか」という問いに対しても男女とも 75％近い生徒が「はい」と答え，パラリンピックに対しての関心の高さを維持していると推察できる（図 1，2)。しかし，設問 5「競技場で観戦したいか」，設問 6「ボランティアをしたいか」という設問に対しては，全体で 50％を割る数値となっており，もう一つ生徒の心に深く根付いたかというと疑問が残る状態であると推察できる（図 3)。一方，本実践が自分の生き方について参考になったかという設問 3 に対しては, 男子が女子より 20％高く「はい」と答えており，男女により差が出た結果となった。この結果から，本授業は男子の心により深く残ったとことがいえる。(図 1，2)。

設問 8「もっと知りたいこと」の自由記述では，競技に関して実際に目で見たり体験したりしたいという意見があった。また，パラリンピアンに対しては人間としての内側

に興味を抱くような記述も見られた。これらの記述から，パラリンピックに対して興味を抱いた生徒は，その後さらにもっと奥深く学びたいという欲求を抱くのではないかということが推察できる（表4）。

5．まとめ

本研究は，オリンピック・パラリンピックの価値をはじめとして，オリパラ教育の意義と必要性，並びにその教材的価値を確認し，オリパラ教育の具体的な取り組みを整理するとともに，実際に中学校においてオリパラ教育を実践しその結果を考察することにより，今後の日本におけるオリパラ教育について提起することを目的とした。

現在，オリパラ教育は，東京2020大会の中心開催地である東京都や国が事業委託をしている地域を中心として広く取り組みが行われている。しかし，その課題として，オリパラ教育がオリンピアン・パラリンピアンを活用したイベント開催にとどまり，それ以外の学習等につながらず，単発的な取り組みなってしまっている[26]ともあるという。実際，教育委員会を対象としたオリパラ教育に関しての調査研究によると，実施内容において最も高い数値を現したのは「オリンピック・パラリンピック選手との交流」であり，さらに，今後教育委員会で実施を検討している内容でも，「オリパラ選手との交流」が最も高い数値を示したという報告がある[27]。一方，学校現場では，どの教科で実施したらよいのかわからない，学校が忙しい中で新しいものに取り組むことは難しいという声もあるという[28]。しかし，オリンピズムやパラリンピックの精神は，そもそも教育が目指しているものに近いので，今ある教育活動をオリパラ教育と関連付けて実施することにその打開策があるのではないかと感じる。したがって，オリパラ教育を単発な取り組みではなく，無形のオリンピックレガシーとして残すためには，「オリンピック・パラリンピックを素材にした日々の教育の充実」という取り組みが肝要に思われる。

中学2年生を対象とした，本研究の授業実践から，生徒たちはパラリンピックに純粋に感動し，自分たちも頑張りたいという思いを抱くことができることが分かった。しかも，1か月後のアンケート結果から生徒たちの心に授業が好印象として残っていることも分かった。オリパラ教育は，教材としての価値を十分に有しているのである。今後オリパラ教育の充実を目指していくためには，体育をはじめとして道徳や特別活動，学級活動，総合的な学習の時間等を絡めた広く教科横断的な指導計画の作成とその取り組みが必要となってくるであろう。カリキュラム編成の際は，実施するオリパラ教育のねらいを明確にして，各教科等の目標と関連付けることが重要である。そうすることにより，

オリパラ教育の位置づけが明確となり単発で終わることがなくなると思われる。

パラリンピックは，子供たちにグローバルな視点や多様性を認め合い，お互いの違いを理解しあう共生社会の考え方を学ぶ好機である[29]。しかし，日本では，残念ながらまだ意識上のバリア[注8]が厚いといわれている。「何を言っているんだ。日本にはクニエダがいるじゃないか。」これは，健常者テニストッププレイヤーの一人ロジャー・フェデラーが，まだ錦織圭がランキング上位に入る前に，日本の記者から「なぜ日本のテニス界には世界的な選手が出てこないのか」と質問された時に答えた言葉である。実はそのクニエダ（国枝慎吾）は，車いすテニスプレイヤーとして，パラリンピックの優勝，年間グランドスラム5回達成，シングルス107連勝（ギネス記録）と「世界のクニエダ」として押しも押されもせぬ絶対的存在なのである[31]。にもかかわらず先の母国記者の質問である。そこには，無意識のうちに健常者と障がい者を区別して考えてしまう意識上のバリアが存在してはいないだろうか。

東京2020大会では，世界中から訪れる観光客やメディアによってオリンピック・パラリンピックの価値が全世界に広められる。本研究の授業実践は，中学2年生が対象であった。そこで，今後は研究対象を小学生に広げて，オリパラ教育を通して「スポーツに留まらないスポーツの価値[32]」と，障害を身体的な個性・特性と認めて「義足とメガネは一緒[33]」と思えるような心のバリアフリーが，レガシーとして鮮烈に人々の心に残るための一助となるよう研究を続けたい。

〈注〉

(1) オリンピズムの考えを広めるための活動すべてが，オリンピックムーブメントであり，オリンピック競技大会の開催もオリンピックムーブメントの一つである[4]。

(2) その中で，IOCはオリンピックの価値として以下の3つを定めている。

・卓越（Excellence）：より高い目標を目指して努力すること

・友情（Friendship）：スポーツを通して得られる友情や絆

・敬意／尊重（Respect）：ルールを尊重してフェアプレイに徹したり，支えてくれる人々に対する敬意

公益財団法人日本オリンピック委員会webサイト参照．http://www.joc.or.jp/olympism/olympian2008/index2.html（2017年11月21日閲覧）

(3) 4つの価値

・勇気（Courage）：パラアスリートの挑戦への勇気

・決断力（Determination）：物ごとを前向きに進めていく上での決断

・平等（quality）：障害のあるなしに関係のない平等な社会を目指す
・鼓舞（Inspiration）：高いパフォーマンスを目指すパラアスリートの活躍が，人々を勇気付け感動させる

障害のある人々が障害を乗り越えてスポーツの極みを目指していく中で，これらの価値が具現化されていくということである[11]。オリパラ教育においては，このそれぞれの価値を中核として学習を進めていくことになる。

日本パラリンピック委員会 web サイト参照．http://www.jsad.or.jp/paralympic/what/index.html（2017 年 11 月 21 日閲覧）

(4) オリパラ教育を通して 4 つの目標を設定している。
・自らの目標を持って自己を肯定し，自らのベストを目指す意欲と態度を備えた人
・スポーツに親しみ，「知」，「徳」，「体」の調和のとれた人
・日本人としての自覚と誇りを持ち，自ら学び行動できる国際感覚を備えた人
・多様性を尊重し，共生社会の実現や国際社会の平和と発展に貢献できる人[19]

(5) 5 つの重点目標は以下のとおりである。
・ボランティアマインド：社会に貢献しようとする意欲や他者を思いやる心などのボランティアマインド，自尊感情の醸成
・障がい者理解：多様性の尊重，心のバリアフリーの浸透
・スポーツ志向：フェアプレイやチームワークの精神の育成，心身ともに健全な人間への育成
・日本人としての自覚と誇り：日本の良さの理解，規範意識や公共の精神の習得
・豊かな国際感覚：世界各国の人との積極的なコミュニケーション，世界の多様性の受容[22]

(6) 東京都教育庁指導部指導企画課が編集・企画を行い 2016 年 7 月に発刊した。オリパラ教育の基本的な考え方をはじめ，小・中・高等学校における「全体計画例」，「各学年校種別の 35 時間の指導計画例」，「推進校の工夫した取組例」等を取りまとめている。https://www.o.p.edu.metro.tokyo.jp/opedu/static/page/open/effort-example-pdf/00_all.pdf （2017 年 10 月 30 日閲覧）

(7) 日本版「I'mPOSSIBLE（アイムポッシブル）」は，パラリンピック教育のためにアギトス財団が開発した国際版教材の内容をもとに，日本の教育現場での活用のしやすさを考慮して，日本財団パラリンピックサポートセンターと日本パラリンピック委員会が公益財団法人ベネッセこども基金と共同開発した小学校向けの教材である[24]。2017 年 4 月に全国約 23,000 の小学校に無償で届けられた。教材名には，「不可能（Impossible）ただ思えたことも，ちょっと考えて工夫さえすれば，何でもできるようになる（I'm possible）という，パラリンピックの選手たちが体現するメッセージが込められている。筆者も直接お話を伺ったが，日本版「I'mPOSSIBLE（アイムポッシブル）」の作成に関わった日本財団パラリンピックサポートセンター推進戦略部プロジェクトマネージャーのマセソン美季氏によると，この教材の活用を通して，2020 東京パラリンピックをきっかけに，障がいのある人への意識や行動が，子ども達から変わることを目指しているという。パラリンピックについて学び，理解し興味を持って応

援に行くことで,「選手のスポーツする姿はかっこいい！」と感じ，競技場を出た後にも自然に意識が向けば，障がい者に対する意識が変わり，社会を変えていけると思うという[25]。

(8) 障がい者が社会生活・社会参加しようとするときに存在する4つのバリアのうちの一つ。障害のある人やその家族を傷つける心無い言葉や視線のことや，障害のある人を憐れみ,「かわいそう」,「気の毒」といった同情の念で見ること。他に「物理的なバリア」,「制度的なバリア,「文化・情報的なバリア」がある[30]。

〈文献〉

1) 友添秀則(2012). いま, なぜ体育理論でオリンピックを教えるのか. 体育科教育. 第60巻第7号. 大修館書店：東京. p.9.

2) 日本オリンピック・アカデミー（2016）. JOAオリンピック小事典. メディアパル：東京. p.58.

3) 東京都教育庁指導部指導企画課（2016).「オリンピック・パラリンピック学習読本　中学校編」. 三松堂印刷：東京. P.42.

4) 真田久（2012）. オリンピックを体育理論の教材にするヒント. 体育科教育. 第60巻第7号. 大修館書店：東京. pp.18-21.

5) 荒牧亜衣（2017）. 日本におけるオリンピック・パラリンピック教育の現状と課題. オリンピックスポーツ文化研究 2017.3 №2. 日本体育大学. pp.99-104.

6) オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議（2016）. オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて　最終報告. スポーツ庁. http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/004_index/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/07/29/1375094_01.pdf（2017年11月2日閲覧）

7) 中央教育審議会（2016）. 幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について（答申）. 文部科学省. P.12. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf（2017年10月30日閲覧）

8) スポーツ庁オリンピック・パラリンピック課（2017）. オリンピック・パラリンピック教育の推進について. 初等教育資料2月号通巻949号. 東洋館出版社：東京. pp.6-9.

9) 真田久（2017）. オリンピック・パラリンピック教育の意義と価値. 初等教育資料2月号通巻949号. 東洋館出版社：東京. pp.10-15.

10) 日本オリンピック・アカデミー（2016）. 2）と同著. p.58.

11) 真田久（2017）. 9）と同著.

12) オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議（2016）. 6）と同著. p.4.

13) オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議（2016）. 6）と同著. p.3.

14) 來田享子（2012）. ロンドンオリンピックが持つ教育的価値を掘り起こす. 体育科教育. 第60巻第7号. 大修館書店：東京. pp.10-13.

15) 桝本直文(2012).「オリンピック教育」の今日的課題. 体育科教育. 第60巻第7号. 大修館書店：東京. pp.14-17.

16）吉中孝志・海野勇三（2009）．実践記録：中学校体育科におけるオリンピック教育の試み．山口大学教育学部付属教育実践総合センター研究紀要第 27 号．pp.59-70.
17）真田久（2017）．9）と同著.
18）オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議（2016）．6）と同著．pp. 26-32．http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/004_index/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/07/29/1375094_01.pdf（2017 年 11 月 2 日閲覧）
19）東京のオリンピック・パラリンピック教育を考える有識者会議（2015）．東京のオリンピック・パラリンピック教育を考える有識者会議最終提言．p.3. http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/press/2015/pr151221/finalrecommendations.pdf（2017 年 10 月 30 日閲覧）
20）東京都教育委員会（2016）.「東京都オリンピック・パラリンピック教育」実施方針．pp.1-2. http://www.metro.tokyo.jp/INET/OSHIRASE/2016/01/DATA/20q1e202.pdf（2017 年 10 月 30 日閲覧）
21）東京都教育委員会（2016）．20）と同著．p.3.
22）東京都教育委員会（2016）．20）と同著．pp.6-7.
23）近藤智靖・滝沢洋平・片桐正広・田中雄大・竹内孝文（2017）．中学校体育理論領域におけるオリンピック教育について―探索的調査をもとにした現状把握と課題提起―．オリンピックスポーツ文化研究 2017.3 №2．日本体育大学．pp.47-56.
24）I'mPOSSIBLE 日本版事務局（2017）．I' mPOSSIBLE［教師用ハンドブック］．pp.44.
25）マセソン美季（2017）．CLOSE UP「障害者」への意識を子供たちから変えたい．公益財団法人ベネッセこども基金マニュアルレポート 2016．p.10.
26）安齋真実（2017）．オリンピック・パラリンピック教育の推進：座談会．初等教育資料 2 月号通巻 949 号．東洋館出版社：東京．pp.20-27.
27）依田充代・清宮孝文・門屋貴久（2017）．オリンピック・パラリンピック教育の現状と課題．オリンピックスポーツ文化研究 2017.3 №2．日本体育大学．pp.31-45.
28）折本昭一（2017）．オリンピック・パラリンピック教育の推進：座談会．初等教育資料 2 月号通巻 949 号．東洋館出版社：東京．pp.20-27.
29）武藤敏郎（2017）．地球を読む「東京 1000 日前」．読売新聞．第 50932 号．読売新聞社：東京．pp.1-2.
30）平田竹男・河合純一・荒井秀樹（2016）．パラリンピックを学ぶ．早稲田大学出版部．：東京．pp.25-28.
31）フジテレビ PARA ☆ DO!（2017）．挑戦者いま，この時を生きる - パラアスリートたちの言魂．さくら舎：東京．pp.10-11.
32）武藤敏郎（2017）．29）と同著．p.2.
33）高橋明（2010）．障害者とスポーツ．岩波新書．岩波書店：東京．pp.47-50.